
時間は氷らない

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間は氷らない

【Nコード】

N8510P

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

【企画作品です。キーワードの『言の葉同盟』から他の作品に飛べます】とある世界『コトノハ』。世界を荒らした竜が神 そして【属性】を与えられた人間によって封印されはや三百年、日々を穏やかに営む人々。しかし世界を再び包む暗雲、竜はまだまだ生きている！対抗できるのは、神の力を得た英雄だけ！そんな中、『吸血鬼の街』に現れたのは棺桶を引き摺った男だった。

1：青年、棺を背負う（前書き）

何気に初の異世界ファンタジーだと思います。探り探り。

宮座頭数騎さんが「言の葉の森」で立てた企画に乗ったお話です。まず彼の作品を読む事をお勧めします。

1：青年、棺を背負う

「寒い……」

長くなだらかな街道を、青年が一人歩いていた。馬車も通る事が出来る比較的広い街道で、人とすれ違う事も少くない安全な道だ。盗賊や野獣による危険が伴う裏道よりは、多少時間がかかろうとこちらを選ぶ旅人の方が多いだろう。しかし青年はやむを得ずという風に渋い顔をしていた。

奇妙な男だった。外套で身体を包んではいるが、ひよろりと高い背から筋肉がほとんど付いていない事が分かる。ならば長い間旅をする事のない隣町からの者かと思えば、その外套は使い古しているのか所々ほつれや染みが見て取れた。そこまで使い込むほど高齢なのかと納得しようにも、体つきに反して足腰は随分としっかりしていた。一見して判断できない姿はそれだけで相手を警戒させるが、その男の最も奇妙な点はそこではない。

棺桶だ。車輪を付けてそのまま縄で引っ張って運べるように細工はしてあるものの、見た目はただ剥き出しのままの棺を伴っていれば嫌でも人目につく。左の肩に縄をかけ引っ張っていく姿に戸惑った旅人も多いが、誰一人声をかけることはなかった。それはそうだが棺桶を引っ張る男に進んで関わりたがる物好きなどそう多くはない。今回の旅路では、そんな物好きは現れなかったというだけの話だ。

「止まりなさい」

ついにこの青年に声をかけたのは、物好きではなく理由ありきだと一目で分かる女性だ。青銅の剣を腰に提げ、胸元に領主が旗に掲げた印をあしらった革鎧を纏っているのは、勿論その領主の配下で

あるからだ。

じろりと、青年の細い目が滑るように彼女の身なりを確認していた。旅人としては当然とも言える。荒くれや盗賊の類が、元の持ち主から奪ったり非合法な雇われ方をして領主の印を持っていないとも限らない。青年の警戒を解くためにも、害意からではないと示す為もう一声続ける。

「聞いているのですか？」

「聞いてますよ、だから止まっただんです」

旅人らしくも無い覇気の無い声に、女は眉をひそめた。かと言って『棺桶を引きずった、長旅をしているようで荒事に馴染んでいるように見えない男』にどんな経歴があるのかも分からない。もしかすると、そうは見えないだけで家族などの弔いの為に街を目指しているのかもしれないのだ、そうだとすればこの消沈した様子も頷ける。無理やりに自分を納得させ、とにかく職務に忠実であるよう努めた。

「それで、俺に何か？ 見た所、あの街の警備が何かをしている方のようですが……」

「え、ああ　そうです、この先はデュラ様という方が治めている領地でして……領地について、理解はしていますか？」

この世界は、地域によって認識の差が激しい。違う土地から来たものは全く違う文化を持っていてもおかしくはないのだ。旅人との会話の際は、まずお互いの常識が通じているかを確認するのがベターと言える。

青年の身なりから推察するに不安ではあったのだが、弱々しげな

笑みと共に告げられた言葉には安堵する。

「はい、一応出身はここからさほど遠くは無いので……随分と長い旅をしましたか」

これで話を通じる　と、思った瞬間。女は思わず身構えた。

「ここからさほど遠くは無い出身地」、それはこの街においてはあまりにも特異な意味を持つ。そう、この街の事を昔から知るような人間が好き好んでここに立ち寄りたいと思うはずが無い。

女のその様子に気付かなかったわけではないだろうが、青年は特に気負いの無いまま道の先を見据えた。

「えっと、ここからもう少しで街に着きますよね？　貴女が居るという事は、ここも領地の一部なんでしょうし」

この土地についてある程度の知識はあるだろうに、敵意も恐怖も無い。女としては拍子抜けだ、いきなり斬りかかられる事すら覚悟していたというのに。

「まあ、確かに。ここからなら日が傾く前には門に着けるでしょう」

とはいえ、何も無いというならそれが一番だ。女も好き好んで人と争いたいわけではない、腰の剣を抜く事がないのならはその方が好ましい。一応の警戒はしつつも、自然と強張っていた身体を落ち着かせる。外からの来訪者というだけでそれほど多くは無いというのに、これほど奇矯な格好をしていればどれほど気をつけようが緊張はしてしまう。

「ともかく、街に入ると言うなら荷を確認させて頂きたい。何か商売だというならこちらに話を通してもらわなければならぬし、危

険物や、あまり馴染みが無いものについても確認して把握しておかないといけませんので」

「え……？」

マニュアル通り、別段この街でなくとも行われるであろうやり取りに、青年の顔は初めて曇った。細い目とのっぺりとした顔でどこか表情が読みづらいが、警戒している　というより、どこか気が引けている様子で一步下がった。棺桶の縄が緩み、女の目も自然とそちらに行く。そもそも、一番気になるのはこの棺桶だ。

いいや、もしかすると『そういう事』なのだろうか？　だからこの土地の知識があっても気にする事がなかったのだろうか。むしろ、それこそが目的と言うならば

今まで何故思い至らなかったのか、女は自分の中で最も高い可能性を念頭に置いた。それならば棺桶の中を見られたくない理由も分かる。

「い、いや……あまり人にお見せするものではないので……。驚かないと言うのなら、そちらにお任せしますが……」

しどろもどろな青年の声に確信する。この反応は今までに何度か見たことがあった。そう、この街に訪れる者の中には『そういう』荷物を持ち運ばなければいけない理由がある人間が存在する。

「いえ、もし私の想像通りなら驚きはしないでしょう……見慣れていますので」

青年の反応を待つまでもなく、女は棺桶に触れた。どうやら黒い

塗装を施した木材で組んでいるようで、所々窪んだ所はあるものの
ほぼ綺麗な形を保っている。すぐに土葬される棺桶にしては勿体無
いぐらいの造りの良さだ、どうやら持ち運びする事を想定して組ま
れたものようである。

だがそれよりも、触れた瞬間に感じたものは

冷たい？

そう、棺桶が指を近づけるだけで分かるほど冷気を放っていたの
だ。確かに中の荷は冷やした方がいいものだろうと女は予測してい
たが、それにしてもこれはありえない。むしろ涼しいぐらいの気候
ではあるが、氷が補充できるであろう隣の街からここまで融けず
いられるなんて事は無いだろう。

再び訪れた疑問が心を支配する前にと、勢いよく棺桶の扉が開く。
おそらくこれも長時間持ち運ぶゆえの配慮か、頑丈な蝶番に支えら
れた蓋がだらんと垂れ下がった。

「……やはり」

死体、であった。まだ小さな女の子だ。子供特有のふつくらとし
た可愛らしさはそのままに、顔色はひどく悪い。それはそうだ、そ
もそも血が通っていないのだから。

中身は女の予想通りだった。この街にとある目的を果たそうと来
る者は死体を持ち歩く、子供の死体もそう少ないわけではない
いや、むしろ多いぐらいかもしれない。

「……！」

だというのに、女は驚き息を呑んだ。驚くべきは、棺桶の中で主
体とも言える死体ではない。

凍っていた。

一見してそうと分からないほど、あまりにも透き通った氷。それを敷き詰めているというのならまだ分からなくはない。隣町からここまで氷がもたないのは自分の常識だが、他の地域にはそれを可能とする技術があるのかもしれない。しかしその棺桶の中身が全て氷の塊で埋まっているとなれば、その光景のあまりの壮絶さに驚きもしようというものだ。

女は一度だけ食べた事のある『ゼリー』を思い出していた。甘い透明の層に埋まる果実の切れ端のように、少女が透明な氷の中に浮かんでいるのだ。少女が水面に漂う様子をそのまま切り取ってきたかのように幻想的な置物じみた、しかしそれは棺桶の中の死体だった。

「……領主に取り次ぎましょう」

その光景について深く考えるよりも先に、似合わない愛想笑いを浮かべる青年に告げた。

分からない事は全て領主様に任せるしかない。私の仕事はここまでだ。

デユラと呼ばれる男が治める、肥沃な大地と壮大な川に包まれた田舎の大都市。これほど農業に適した環境だというのに近くに他の村や街がないこの土地は代々『吸血鬼の住む土地』として恐れられてきた。

そしてそれはその女の知る通り、真実であつた。

男は一人、悠然と盤の上に駒を並べていた。

人間一人が生活するにはいささか狭い部屋ではあるが、長机に腰掛け手持ち無沙汰に駒と戯れるには十分な空間だった。それ以外にする事と言えば書類の整理や部下への指示、略式の面会ぐらいだ。つまり、この部屋はその男の執務室である。

白さを通り越しもはや青みがかつて指で駒を適当に並べながら、切れ長の瞳を細める。どこか規則性があるようでやはり乱雑な順列は、意味があるのかどうかさえ本人にしか理解できない。

「さて、そろそろかな……来なければ、それもまた因果」

硝子が響くようなその高い声も、男に容貌によく似合っていた。一つでも欠ければ滑稽にもなりかねない特異な美こそがこの男であった。

間断なく駒を動かし盤上を見つめていた男であったが、ふと顔を上げた。

「入れ」

ノックがあつたわけではない、足音が聞こえたわけではない。しかし男はさも当然という風な涼しげな表情で扉を見つめている。それから間を空けず扉がゆっくりと開かれた。

「失礼します」

この執務室に入る時は毎度毎度困らせられる。扉の前に辿り付く前に部屋の主から返事があるのだから。おかげで、いつ声をかけていいのか分らない。

表情には出さず脳裏で愚痴を吐き出しながら、女は淡々と入室を

告げた。勿論、街の入り口近くで出会った青年の件で、である。

「執務の最中、申し訳ございま」

形式通りに頭を下げ言葉を続けようとした女の口がぴたりと止まり、部屋に陣取り駒遊びを続けるその特異な美を睨みつけた。

「デユラ様……」

「おいおい、そう固い事を言うなよ。大丈夫、仕事はほとんど終わってるさ」

確かにこの街では領主に判断を仰ぐような案件は他の街に比べて少ない、国との関わりは通常通りとしても周りに街や村がないのだから自然と交流も少なくなるからだ。そう、少ないのだが　そうだとすると、与えられた分の仕事はきっちりこなして欲しい。部下一同、切実な願いだった。

密かに息をつき背後を見遣ると、青年は棺桶を背負いながらただ立っていた。今のやり取りを見てなんとも思わないのか、無表情である。棺桶もとりあえず手放す事を提案したのだが、肌身から離したくないそうだ。

「さて、それでそちらの彼かな？　僕に用があるんだろう？」

対し、領主ことデユラは青年に微笑みかけた。これがこの街の領主の基本的なスタンスだ、誰とでも友好的に親密に距離を詰めようとする。おかげで、この街では領主を慕う人間も多い……外部との評判とは裏腹に、である。

「あの件です」

淡々とした女の言葉に、「ほお」と大仰に驚いて見せてからデュラは先ほどよりさらに笑みを深めた。

「つまりその君はこう言うんだね？ 吸血鬼であるこの街の

領主、デュラ「サバナクルトウに自らの大事な人間を、既に死んでしまったその人間を、すっかりそのまま生き返らせたいと」

青年の無表情が、揺らぐ。いかなる感情によるものか、口元が緩み目が生気を帯びる。

そう、この街は吸血鬼の街だ。いつからこの街が存在するのか、誰も知らない。ただ数百年にも渡ってデュラという男がこの街を管理しており、そのデュラが人外存在である事を知っているだけだ。近隣の住民は伝承によりこの土地を忌避しているが、暮らしているものにとつて見れば「吸血鬼だからそれがどうした」、といったもののなのである。実際、デュラは圧政を敷くわけでもなく夜な夜な娘を浚っていくわけでもなく、特に有能とはいえないが無能ではない働きでこの街の領主を続けていた。国にもどうやらこの事実は認められているようで、つまりこの街の人間にとつては吸血鬼すら日常なのだ。

しかし、外部の人間にとつてはそうではない。吸血鬼などというのは御伽噺、神話上の生物だ。人間より遙かに長く生き、時に獣に姿を変え時に霧に姿を変え、その腕は岩をも砕き剣で貫かれようがたちまち傷が塞がっていき そして、血を吸われたものは例外なく眷属として同じ時を生き長らえる事になる。

「ああ……その通りだ。俺は……貴方に、それを頼みに来た」

爛々と瞳を輝かせながら棺桶を開く青年。そこにはやはり氷詰めの少女が居るが、デュラは先ほどのようなわざとらしい驚きすらし

なかった。笑っている、二人は笑っている。しかしその間にある張り詰めた空気は決して生易しいものではない。お互い、相手の出方を待っている。

「ふうん……ま、出来ると言えば出来るさ。僕の牙で一刺しすれば、動く死体の出来上がりい、ってね。でも、それで？ そんな事をした所で僕に何の得があるのかな？」

何度もこの部屋に、吸血鬼の蘇生を求める客を通してきた。そして通された人間はいつもこの問いを受ける事になる。「僕に何の得があるのか？」。

今までにこの問いを突破できたものは居なかった。いつだったか、王室に影響力のある貴族の願いすら聞き届けなかった事がある。そう、普通に考えればこの旅人のような身なりの男がデュラを満足させられるはずはない。

しかし 女は思う。あの氷詰めの少女は見た事もない技術だった。あんなものが作れる男ならばあるいは、と。

「俺を売る」

しかし彼の口から出てきた言葉は、あまりにも突飛なものだった。思わず口を突いて出そうになった驚きの声を飲み込む。

確かにこのようなことを言う人間は珍しくない、本当に追い詰められた場合に限りだが。初めから自分の身柄を引き渡すと しかも他に価値のありそうなものを示しすらずに そのように言うのはどうかしている。

しかし青年の目は揺らがない。それを見ながら、デュラは

「買った」

一言で返した。

「は？」

今度こそ声が出た。間抜けな響きの女の声に、デュラと青年は同時にこちらを見る。恥ずかしい、しかしこの状況に対する疑問の方が勝っている。

「で、デュラ様、本気ですか！？ 人間一人を確保したぐらいで、貴方の心が動くななんて」

「ああ、それなら答えは何てことない。これ、さ」

ヘラヘラと相好を崩し棺桶を指差すデュラ。元通りの無表情に戻る青年。口を開けて呆然とする女。

数秒の沈黙を破り、デュラが続けた。

「さて、君も疑問のご様子だし、ちょっと昔話でもするかな？ なあに、よくある御伽噺 神と人と、竜の話さ」

2：吸血領主、楽しむ

さてさて、詳しい月日なんてとうに忘れてしまったが、まあ今より二、三百年は昔の事だったと思う。その頃の僕はまだまだ吸血鬼としてまだまだ若く、時に熱く時にほろ苦い青春を過ごしていたものさ。いやあ、川原で殴りあったり一夜の過ちを犯したり、今では出来ないような無茶を沢山したねえ。

失礼、君達はこんな話を聞きたいわけじゃないね。まあそんな風に僕が神話に恐れられる吸血鬼としての役割を果たしていた時、だいきなり奴ら、竜が現れたんだよ。

君達も御伽噺でぐらい知っているだろうけど、本当の事なんだよ？ とにかく、あの時を過ごした者として言わせて貰えば凄まじいの一言に尽きるね。僕は今と同じように一箇所に留まっていたから知らないけれど、世界各地で被害があったらしいよ。色んな種族が立ち向かったり、普通に暮らしてただけでも被害を受けたり……あれで滅びちゃったり引き籠もっちゃったりした種族も多いんじゃないかなあ。地形が変わったり、国が再編されたり……まあ大破壊であつたと共にあれが歴史のターニングポイントであつた事は疑いようがない。それのおかげで僕はこの街の領主になつたようなものだし……まあ、こんな風に気楽に話せるのはあれから長い時間が経つたからさ。

あの頃はそれはもう、酷かった。世界が滅亡するんじゃないかと明日は我が身その次は世界そのものかと戦々恐々としていたよ。勿論僕もね。それぐらい竜は圧倒的だった。……この世界の誰も竜を倒す事が出来ず、絶望したさ。復興なんて考えてる暇もない、なんたつてその時は皆この世界が滅びると思っていた。あんなものに勝てるか、ってね。

それでも今、人類は生きている。なんでかつて？ そりゃ、君達も神話で知っているだろう？ 神様だよ。神様が突然現れて人間に味方してくれたのさ。竜を封印する為の素敵なアイテム引っさげね。

その上で、一部の人間に竜に対抗する力を与えたんだ。全てを人間の手に委ねたのさ。

こうして神の力を手にした勇者達は神の道具で竜を次々と封印していき、ようやくと今の時代の平和を勝ち取ったのさ。これが今は寝物語に埋もれてしまった過去の真実と言う奴だよ。

デュラの執務室よりは幾分か広い今に、一組の男女と棺桶の姿があった。ばちばちと音を立てて燃え盛る暖炉の傍、中央の椅子やテーブルに見向きもせず床に座り込んで青年は棺桶を見つめている。蓋は開いており、幾分か水を湛えた表面ごしに変わらない少女の穏やかな寝顔があった。

「久しぶりに、寒くねえ……」

青年は一人、虚空に向けて呟く。誰に向けてのものでもなかったが、一人離れて椅子に座っていた女には聞こえた。特に向き合うでもなく、背中越しに話かける。

「何かの技術ではなく、貴方自身に備わっている力だったのですね。その氷は」

「あ、はい……まさか竜を倒した勇者の力だとか、そういうのは知りませんでした」

そう、あの後二人はデユラから真実を聞いた。御伽噺と化している竜退治の実体験を。

部下である女も初めて聞いた事だったが、デユラ・サバナクルトウは勇者と共に竜と戦った者の一人だったらしい。とは言っても彼が共に戦った勇者はそれほど活動範囲が広がったわけでもなく、封印した竜は一体だった。

竜を倒し、氷を操る勇者はこの力を後世に伝える為にもどこかで村人と結ばれ、デユラはその永い寿命がゆえ竜の見張り役としてのこの街の領主となった。

そう、伝説の竜はこの近くに眠っているのだ。

「でも、この力……今までロクな使い方してなかったな。自衛だったり、日銭を稼ぐ為の暴力ばかりでした」

すう、と青年の骨張った指が少女を包む氷の表面を撫でる。炎に溶かされた水滴が指の先に付き　そして、次の瞬間には凍っていた。そのまま水滴を基点とし、水が染み込むようにゆっくりと細い細い氷の柱が現れた。

やがてそれは、一輪の花を象り　しかし花びらを形作っている最中に茎から折れてしまった。

「こんな綺麗な事も出来たのに、練習してないから上手くいきやしない……こいつが目を覚ました時の為、練習しておきましょうかね。女性としてどう思います、これ？」

男は初めと比べて随分と饒舌になっていた。お互いの素性が分かり打ち解けた、というのもあるだろうがそれよりも大切な者の復活を前にして気分が高揚しているらしい。少なくとも、あの子供のような狂気のような瞳は女にはそう見えた。

結局、女は椅子から立ち上がった。砕けた氷の花びらを拾い上げ、指の力を緩めていたはずなのに砕けたことに驚く。青年は苦笑し、女は革鎧から着替えた布服の袖で指を拭う。

驚きを態度に出さず、女はごく自然を装い問うた。いつか、大切なものを蘇らせたいと願った人間に聞いてみたかった事。

「個人的な興味で質問させてください。気分を害したなら結構です」

「あ、はい。答えられる事なら……」

「その子供は、貴方にとって何なのですか？ 何故そこまで生き返らせたいのですか？」

極めて冷静でいたつもりなのに、言葉が震えた。青年も幾分か戸惑った様子で、深刻な響きに躊躇っていたようだが、やがて口を開いた。

「よくある話だと思います。俺は捨て子なんですよ。ここからちょっと先の方にある村の畑で寝てたそうです」

口調はあくまでも軽かった。

「それで拾われて、初めは普通の子供として育ててくれて その人たちには凄く感謝してますよ。でも、俺ってほら、この氷があるでしょう？ 自分で言いふらして、それで訳も分からない内に村長の家に住む事になって」

ただただ、軽やかだった。

「そこからは村の備品扱いでした。」

新鮮な水を貯蔵する為、作物の冷凍保存の為、事ある毎に力を使いましたよ。いや、それだけならいいとは思うんですけどね。嵐が来た時は作物を守るため、ずっと畑全体に氷で壁作って守ったり向こうが備品扱いに慣れたら、俺自身が氷室になったり 酷いと思いませんか？ 嵐の中丸一晚駆け回ったと思えば、家に帰れば毛布を被つてもどうにもならない寒さだ。寒いのに慣れ過ぎちゃって外に出ると暑いと思うようになってちやって、これが普通じゃないと忘れない為に、一日一回は「寒い」と言うようにしてました」

折角氷を作れるんだから、身体も寒さに強ければ良かったんですけどね そう締めくくり、青年は笑った。

なんと言っていていいか分からない。何も言葉を考えぬまま口を開き、ただ舌が空回る。青年もその反応を予想していたのか、ただ笑むばかりだった。

「……なら、その子供は」

結局、彼の素性については何一つ口を挟めなかった。青年も表情一つ変えない。

「ええ、お察しの通り。僕の、友達です。……彼女がこうなってしまっってから、もうどれくらい過ぎたのか覚えてませんけどね。あの頃は僕の背もこいつと拳二つ分ぐらいしか変わらなかったんですよ」

見た所、少女はまだ農村部であろうとも働いているかどうか微妙な年頃だ。対して、今のこの青年は体の成長が終わってもう久しいだろう。一体、この少女はどれだけの日々を氷漬けのまま過ごしているのだろうか。

「……こんなはずじゃなかったんです。頭を打って、そのまま動か

なくなつて……怪我なんか、なかつたんですよ？ 大人は皆、『驚いて魂が抜けたんだろ？』なんて言つて、死んだつて事になって、それで、葬式までに腐つたら悪いからお前が凍らせておけつて言われて……」

そこから、青年の言葉は独りよがり加速した。今まで女に聞かせるためだった話が宙に浮く。誰の為でもなく、飲んだ泥を一刻も早く吐き出したいと言う風に無感情な言葉を紡いだ。

「運んだ時に、びつくりするほど重かつたんです。今までずっと軽いつてたのに、重かつたんですよ。それがとても恐ろしくて……逃げました。僕は彼女を連れて逃げ出しました。村の人がどう思つてゐるかとか、今はどうしてゐるかとか、そういう事は怖くて確かめていません。ただ、初めは暑い所を目指しました。そこで氷を使つて駄賃を稼いで、自分一人が食べていけるだけの額を稼いで、棺桶も持ち運びやすいように新調して、それでやっと決心が付いてこの街に来て……今まで、俺、一回もこいつの氷を溶かしてないんです。怖いんですよ、俺。卑怯者なんです。生きてほしいのに、死んだ方が安心して。死んでいたら、きっと何も出来なくなる」

「素晴らしい！」

青年の独白をさえぎる形で、甲高い男の声が部屋中に響いた。

「いやいやいやいや、死んだ人間を生き返らせたいなんて人間らしくて愛しかつたが、君の人格はととても人間染みてるじゃないか！ しかもそれを素直に人に話せるなんて、いやあ流石はあの人の子孫！ 僕個人も気に入つたよ！」

この部屋で神妙に話していた二人は、そろつて大口を開けて硬直

していた。何と言ったって、いきなりデュラが天井から逆さづりで現れたのだ。

しばらくして、先にまともに戻ったのは女の方だった。眉間に皺を寄せ、頭を振る。

「デュラ様……そう来客を驚かせるような行動は謹んで頂きたいと何度も……」

「いやいや、テンションが上がっちゃってねえ、上がっちゃうだろう？　なんたって、我らが望んだヒーロー様が現れたんだからねえ」

青白い顔一杯に人の良さそうな笑みを浮かべ、逆さ吊りの男はそのまま浮遊する。落下、と形容するには緩やかな動きのまま、どういう力が働いているのかふわふわと浮いたまま床に手を付く。

「やあロダ、青年、準備をしたまえ。龍が完全に目覚めてしまう前にひとまず地理と状況の把握を兼ねて街へ降りようじゃないか」

さて、うん。どこまで話したかな？　ああ、そうだそうだ。我らが敬愛する勇者サマが龍を封印してめでたしめでたし、だったね。

あの後、龍を封印した彼らがどうなったのか、僕もほとんど把握しちやいない。なんたって龍と同様に、彼らも沢山沢山居たんだからね。僕が会ったのなんてひい、ふう、みい……まあとりあえず、ほんの一握りだったってことさ。

その中でも僕は、青年君のご先祖様である氷の使い手と一緒に龍を倒していてね。そのまま僕はずっと龍の見張り役さ。途中で王様と交渉して貴族になったりまあ色々と冒険譚はあるんだがね。基本的には平和で退屈で素敵な日々だったよ。そう、ついこの間まで

はね。

なんというかさ、龍が復活するみたいなんだ。

兆候を掴んだのはつい最近だよ。これでも一応見張り役だからね、小まめに点検はしていたんだ。で、よくよく見てみるとそろそろ封印の神具が壊れかけてたって言うか……まったく、神様もいい加減な仕事してくれるよね。

あの龍は、駄目だ。確かに他に強い龍、恐ろしい龍、奇抜な龍は居るが……あの龍に限っては対処が難しい。そうだね、倒すだけなら魔術でも使えばやれない事はないかもしれないが……それではちよつとばかり困るのさ。端的に言おう、対処を間違えればあの龍に勝とうが負けようがこの地は滅ぶ。まったく、世知辛い現実さ。

そんな訳で、数日前から町民にその事を伝えて避難でもしようかと思っていたんだが、そこで現れたのが君って訳。いやはや、やはりあの人と僕は運命で繋がれているらしい！

「ところでロダ、二人であの部屋に居たはずなのに挨拶はまだなのかい？」

ふと、デュラの軽やかな声が耳に届いた。名前で呼びかけられ少し足を止める女だったが、すぐにデュラと同じ速度で歩き始める。

「私の個人情報などどうでもいい事ですので」

女　ロダは表情を動かさずに答えた。彼女からは顔が見えないが、わざとらしい驚きを試みせるデュラの表情が脳裏に浮かん

「ほう、そいつは失礼したね、青年。だが折角だ、彼女の紹介は盛大にやらせてもらおうでしょう　この先でね」

「あー、いや、この人がロダって名前なのは分かりましたけど……なんですか、盛大につて？」

「ははは、それはお楽しみと言う奴さ」

ロダの頭ごなしにデュラと青年の会話が交わされる。それをなんとも思わず、ただロダは前を歩く主の歩幅にのみ気を配っていた。

あの部屋を出て、三人は廊下を歩いていった。領主の屋敷として平均的な大きさであるデュラの住居だが、それでも通常の生活空間より無駄に広く出来ている。街へ出掛けると言ったデュラがまず向かおうとしているのは、彼お気に入りの一軒の贅沢とも言える空間だった。

衣装部屋である。デュラ自身が着る為の服も勿論あるが、彼の本懐は部下や街の人々に服を押し着せる事だ。駒遊びや狩りなど貴族階級として当たり前前の娯楽を除けば唯一の散財なのだが、他の街から取り寄せる事もあるので中々馬鹿に出来ない。領民が喜んでいるからいいものの、あまり財政に優しい趣味とは言えなかった。

「そう険しい顔をするなよ、別に厳しい税を取り立ててきりきり働けーいつてやってるわけじゃないんだからさ。毎年毎年、積み立て分からも余ったお金で少おーし、ね？」

顔に出ているだろうか。振り向き眉をしかめるデュラだった。

「その少しの内容が我々にも把握できていないから問題なのです。いい加減、部下へのサプライズなどというのはやめて頂きたい」

鏡のように返される口ダの不機嫌な表情　デュラは参りましたと言わんばかりに肩を竦めて、足を止めた。その目の前には、両開きの長大な扉があった。人が縦に二人並んで入れそうなこの部屋、元は仰々しい謁見の間であつたらしいのだが

「さ、入ろうか。青年君、見て驚いてくれたまえ。僕の歴史をかけたコレクションをね」

デュラが両の手をかけて押し開いた扉の先は、とてもそうとは思えない光景が広がっていた。

箆笥が、無数に広がっている。壁際を埋め尽くし、箆笥で区切られた通路が幾筋もあった。元々領主の座であつた場所にはカーテンが引かれ、この場で着替えを済ませる事が出来るようになっていた。

青年の口をぽっかり開けている間抜けた表情を見　口ダは痛快さと暗澹とした気持ちが入り混じったなんともいえない心持ちだった。この部屋は素敵だとは思ふ。しかし時の国王によって建設が指示されたという館の、よりもよつて要ともなる謁見の間を丸々衣装箆笥に変えてしまったのである。卒倒するほど無礼な部屋だった。

「さてさて、僕は普段から身だしなみは整えているし別に公式の場ではないから華美な装飾はノーサンキューといった所。となるとやはり、やっぱりここは君かな？」

「……はあ？」

また始まつた　と表情を動かさない口ダとは裏腹に、青年は気の抜けた声を發した。どうやら未だこの部屋を見たショックから立ち直れていなかったらしく、開いた口もそのまま首を傾げていた。

喜々として何やらステップを踏みつつ次々と扉を開いていくデュラ。虫食いを防ぐ為だと言う香の匂いと共に、色取り取りの布が目

前に現れる。街に出掛けると見かけるような服から王宮へと出向くのに恥ずかしくないような一品、はたまたどうやって着るのか首を捻らなければいけないような物まで様々だ。

「ちょっと待ってください、御領主。何で俺の服なんか……」

青年はやはりと言うべきか、困惑した様子だった。その声に応え、デュラは演出過剰に両腕を一杯に広げて振り向いた。虹色に染まる背景を背負い立つその姿は舞台に立つ役者のようでもある。どこか演技がかった、しかしその力強い姿は二人の気を引いた。無駄に。

「何で？ 何で、と今聞いたかい？ それはあまりに無意味な問いだよ、棺桶を引きずっている間に忘れてしまったかな？ 人間は姿かたちの印象が大事さ。特にそれがいいイメージを持ってもらおうな」

そこで、やはり演出過剰に一拍置き

「竜退治の英雄ならね」

告げた言葉に、ロダも青年も知らず息を呑む。

「やっぱり、俺を買うつてのは……そういう事ですか？」

「ああ、勿論。あの竜を相手にまともに当たったら被害を受けるのはこつちさ。もしかしたらこの広い世界、あの竜を鎮められる【属性】は他にあるのかもしれないけど、そんなものを待つて暇はないよ。勇者は来るべき時に来る者、そして君はここに居る。僕を知る限りあの竜を唯一鎮める事が出来る、氷の能力者がね」

2：吸血領主、楽しむ（後書き）

とりあえずここまで。次話までしばらくかかります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8510p/>

時間は氷らない

2011年1月8日20時06分発行